

「映画を手段とした市民初イノベーションの取組」

NPO 法人ワップフィルム理事長／監督 高橋 和勲

7月から8月にかけて、日本国内の映画市場は激戦区となる。一年でもっとも興行収入が見込まれるこの時期を巡り、映画大手各社は、半年前から莫大な経費を投じた宣伝活動を開始する。国際的に名の知れたハリウッド作品でさえ例外なく熾烈な競争の洗礼を受けなければならない。

まさにこのような時期、私が監督を務めた市民映画「未来シャッター」は、東京都の静かな下町商店街でロングラン上映をスタートした。市民映画とはなんなのか、とよく聞かれるが、つまり市民が主体となって、映画の企画から製作、配給、上映まで行う非商業的活動のことである。商業映画を作ることが目的ではなく、映画を通じて集結された市民力を生かしたイノベーションが目的である。

市民全員参加型で企画した異例の映画プロジェクト！
中小地域間連携による、産官学市民全ての御協力で製作！

STORY
映画会社を退職し心を閉ざしたOL未婚、職歴を転々とする篤志、外国人留学生アット二オ、自分らしく生きようとするほど、今の社会に生きにくさを感じ、適合できない青年たち、居場所を求めて、白から未来を創りだそうと動き出した時、地域金融圏に響ける久美、ブリッジパブリックと出合いで再チャレンジの冒険が――、主人公たちが昇られるように訪れる東京蒲田、漣田や藤沢のまちの風景、商店街、ものづくり、町工場、農業、地域に根付いて日本から世界へ挑戦する人たちの輪が繋がっていく――、全てを越えて新たな気づきと不思議な縁が生まれ、多様な思いが重なり合い――、やがてよそ者×若者の奮闘が地域社会全体を巻き込み次世代のシャッターを上げる！

各界のリーダー大集結
本物が演技を超える

協賛団体50以上
Facebookは超過600人以上 (2015年7月現在)

2015年7/1～ロングラン上映決定
全国順次ロードショー開催

東浦田二丁目交差点 キネマ通り商店街
キネマフューチャーセンター
03-3573-5692
kinemfc2013.wix.com/kinemafuturecenter
京急蒲田駅 東口 徒歩5分

写真1 映画「未来シャッター」フライヤー 裏面

今思えば、この映画プロジェクトの原点は、資金も設備も専門知識もないたった十数人の有志が「地域社会に役に立つ映画をつくりたい」という思いだけで始まった勉強会にさかのぼる。しかし3年後、映画が完成するころには、協賛団体・組織は企業、行政、教育

機関、地域金融機関、交通機関、協同労働組合など、70 団体、個人にしては 600 名以上がかかわる大掛かりのプロジェクトに進化した。自分達が暮らす地域・社会の未来を切り拓きたいと思う人達が、ロケ地提供、特別出演、撮影等、様々な形で協力しながら、一つの映画として完成した。映画製作の全工程で市民ボランティアが参画し、さまざまな強い想いを込めた。映画製作の過程で、空き家をリノベーションし地域拠点（現、キネマフューチャーセンター）を作り、モノづくり職人と和菓子職人の技術交流が興り、地方の農業と地域ブランドを結ぶ事業が促進された。これから全国で上映されていくうちに各々の地域で様々な革新を生みだしたい。

この映画に登場する主人公 3 名のプロ役者を除けば、すべての登場人物はボランティア（一般市民）である。もっとも面白いのは、映画で登場する各界のリーダー達は、実在の人物であるという点である。彼らの言葉は、セリフではなく、本当に彼らが今思っている警句そのものを採用した。フィクションとドキュメンタリーが交錯する、新感覚の仕上がりとした。そのため、彼らがこの作品の隠れた主人公であるとも言える。

この作品を通じて描きたかったのは、今の日本社会が抱える病理的な側面である。これだけ物質的に豊かになった社会であるにも関わらず、人達の心も社会も閉ざされている。現在、日本中で「シャッター通り（閉鎖した商店などが目立つ商店街）」が問題となっているが、そのシャッターを上げる狙いもある。

もっと根源的に言えば、人間は、あらゆる場面で、必要以上に「線引き」をしたがる。「日本人だから」「中国人だから」に始まり、「女性だから」「子供だから」「最近の若者は」「あの人は会社を辞めた」「学校を辞めた」など。無益な線引きをやめ、乗り越えたときに、本当の意味がある。そういう問いを投げかけている。

映画の柱となるストーリーには、おそらく中国社会ではあまり見かけない、日本の若者達の実像が映し出されている。仕事を辞め、自分の生き方を模索する女性、職業を転々とし、再度大学生となった男性、外国人留学生など、居場所が見つけられない若者達がどのように成長し、社会を変えていくか、その過程が描かれている。

特に、今の日本で問題なのは、未来を切り拓いていく若者達の心のシャッターである。彼らを未来志向に転換していく。更にもう一つの「シャッター」として、カメラのシャッターの意味を込めている。今まで素通りしていた地域やそこで生きる人々に向かってシャッターを切り、描き出された 1 コマ 1 コマを繋ぎ新たな世界を作ろうとしている。



写真2 TIAT SKY HALL 初試写会 第2部舞台挨拶



写真3 撮影後記念撮影 梅屋敷東通り商店街にて

このプロジェクトは組織、個人関わらず、参加者達の拠り所であり、自分との戦いであり、世の中や地域への挑戦であり、自己成長であり、各々の想いで臨んだ。公民館やコミュニティカフェなどで、地域住民によるワークショップを繰り返し、企画を練った過程は、かつての日本文化の「寄り合い」「井戸端」を彷彿とさせる。孔子は『論語』で「温故知新」を説いたが、まさにこのプロジェクトも、古き良き時代のスタイルと現代風のセッション

の融合で実現した。

映画製作は、通常、製作スタッフの指示や命令、関連会社との経済的繋がりで作り上げる。利益や目論見が原動力となっている。しかし、未来シャッターネットワークプロジェクトは違う。本作を製作した我々NPO 法人ワップフィルムは、市民の力によって、映画産業の仕組みを変え、ボーダレスの立ち位置で地域の未来を切り拓き、新しい社会を創り上げていきたいと考えている。

この3年間、挫折しかけたこともある。自分たちの活動を続けることへの不安、協力者への配慮、関わるスタッフの体調など、限界＝境界が見えたこともあった。商業映画は雇用関係と指示系統があり拘束できるので撮影に集中できる。しかしこの映画プロジェクトは損得勘定を超えた関係性を築きあげて成立する。出演協力下さった皆様の撮影場所、時間には制約がある。一方、撮影、照明、録音は商業映画を手掛けているプロの職人は最高の映画を撮りたいという拘りがある。お金で解決できないからこそ、皆の意志決定、合意形成には配慮した。

この映画の一般上映は今年7月。まだ始まったばかりであるが、公開前から話題作として注目されている。東京・蒲田のキネマフューチャーセンターという映画撮影の拠点となった場所に多様な方々が集い、上映セッションを続けている。ただ映画を観て終わるのではなく、その後、皆で感想やありたい未来社会について共有する時間を設けている。経営者、社会起業家、教育関係者などがそれぞれの立場で意見交換しあうことで、明るい未来社会を描くことを目的としている。

今後は「自主上映」主催者も募っていく。自分たちの未来は自分達で創っていく人たちに主催して頂きたい。「自分のまちでも映画を企画上映したい」というネットワークが世界に広がっていくことを願う。